

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【授業担当者】

所属/職名: 歯学部

氏名: 准教授・平間雅博
 教授・西谷佳浩
 准教授・犬童寛子
 准教授・三浦裕仁

授業科目名	海外歯科研修プログラムV
研修先 (大学・国・都市名)	アイルランガ大学(インドネシア・スラバヤ) プリティッシュコロンビア大学(カナダ・バンクーバー) マラヤ大学(マレーシア・クアラルンプール)
研修期間	エアランガ大学プログラム: 令和4年9月7日～令和4年9月20日 プリティッシュコロンビア大学プログラム: 令和4年9月8日～令和4年9月22日 マラヤ大学プログラム: 令和5年3月6日～令和5年3月10日
<p>【研修の目的・概要】</p> <p>①研修の目的と概要 目的: グローバル、またグローバルに活躍できる国際的な視野・考え方を持つ歯科医療人の育成を目的とする。 概要: 鹿児島大学の「進取の精神」に基づき、学術交流協定校に歯学部生を派遣する海外歯科研修プログラムを2016年度に創設した。現在、各学年の学習進捗に合わせて、海外歯科研修プログラムIII(3年次用)とIV(4年次用)、V(5年次用)を設定しが各学年の学習進捗に合わせて連続的に行われている。 本プログラムは、歯学部の教育目標の一つである「国際社会においても卓越した貢献をなす歯科医師および歯科医学教育者・研究者の育成」と歯科医学教育のコアカリキュラム「歯科医学・医療・科学技術の進歩と社会の変化やワークバランスに留意して、歯科医師としてのキャリアを継続させる生涯学習者としての能力を身につける」に対応する。</p> <p>このプログラムを通し、学生は学術交流協定校[アイルランガ大学(インドネシア共和国)、プリティッシュコロンビア大学(カナダ)、マラヤ大学(マレーシア)]の学生、教員と英語または現地語で交流する。文化や宗教の異なる価値観に接したり、社会システム、特に歯科医療システムの違いを学習して、日本国内にとどまっていたには体験できないダイバーシティを理解する。また、歯科に関わる問題の国際的な違いを理解し、従来より視野の広い歯科医師を育成する。 本プログラムは、事前学習、事前交流、現地研修、事後学習からなる。各段階で、鹿児島大学の担当教員、協定校の教員・学生と連絡を取り、ディスカッションして学習を進める。</p> <p>事前学習 ・教員とディスカッションを行い、各自、海外研修に行く目的を明確化して、交流計画を完成させる。(4月-渡航日まで) Project Based Learning (4月-渡航日まで) ・受講生全員、または、研修先が同じ学生でTeamを作り、交流に使う英語、現地語をまとめる。 ・事前交流・オンライン交流・海外研修先で発表するために、Visual aidを用い、自己紹介、日本、鹿児島、鹿児島大学のVirtual Tour(ムービー)を英語または現地語で作る。学生は、その政策を通して日本および鹿児島の社会システムや、特に歯科医療について改めて学びなおす。 事前交流: オンラインミーティングを含む事前交流を協定校の教員や学生と行う。(渡航1-2か月前まで)協定校のうち高雄医学大学とは、これまで、紹介ムービーのやり取りやオンラインミーティングなどの双方向の交流を続けてきた実績があり、本プログラムに参加する学生の数も2020年度の交流に参加している。また、他の協定校についても、現在まで鹿児島大学の担当教員と協定校の教員の間でディスカッションを行っており、渡航前にZoomなどを利用したオンラインミーティングを行う計画である。 海外研修: 協定校の学生と共に、授業、実習に参加する。歯科診療の見学、地域社会活動への参加や余暇の時間を通して協定校の教員・学生と交流し、社会システムや歯科医療におけるダイバーシティを経験し、理解する 事後学習: 帰国後ただちに報告書、研修成果発表準備を進め、歯学部全学生職員を対象とした海外研修報告会で研修先大学ごとに分かれ発表する。質疑応答を含むディスカッションを通して、渡航研修で得た知識を今後どのように活かすかを整理する。</p> <p>【研修の成果】 *事前・事後学習も含む。研修の目的や学習成果の達成状況について、また地域のグローバル化や活性化に資する人材育成の観点からの成果についても記載して下さい。 事前学習として、研修地に関し事前に勉強し、自己紹介や鹿児島大学について説明できるように自己学習を行った。学生たちの準備していた語学学習(会話)は現地の授業への参加時や病院見学時など役にたち、事前学習の成果を見ることができた。また、現地渡航直前にはマラヤ大学の現地職員とのテレビ会議ツールにて面会し、研修中のスケジュールの問題や不安を取り除くことができた。エアランガ大学の職員とはSNSでのグループチャットを数か月に渡り行い、渡航前準備ができ、研修が成功した。プリティッシュコロンビア大学の場合は、ZOOM会議を予定していたが、現地職員の都合でキャンセルになってしまったが、それまでにEmailで申請書の準備やプログラムの説明などを受けていたので、安心して現地研修ができた。 研修地では、他校からの留学生とも一緒に、一緒に日本で行った研究発表を急遽現地で行ったり、現地でのアナログのレントゲン写真に驚きつつも、アナログの良さも学修できたり、現地での小学校訪問、ボランティアイベントに参加し、民族衣装や伝統の踊りなどを体験したり、興味のある口腔外科学の見学に十分な時間を割いているような処置や現状を学習できたり、現地校の職員がそれぞれ学生たちの興味を引き出し、研修を充実させてくれた。英語での会話では難しいところもあったが、現地学生や職員が補助してくれ、理解でき、異文化や教育システムの違いを見出すために現地の学生や教員とDiscussionもできたようである。 事後学習では、各大学毎に研修内容や研修前と後の学生自身の変化などをプレゼンテーションするビデオを10-20分程度にまとめ来年度の研修発表会に向けて準備している。まとめの中では、授業や実習だけから得るものではなく、他校からの留学生との交流を広めたり、現地教員の家族との交流など、人生に影響を及ぼすような体験をし、人間的にも成長したようである。 現地でのダイバーシティを体験したり、外国人とのコミュニケーションを体験したりし、コロナ後のグローバル化の加速していくうえで、これまで躊躇していた国際的貢献ができる人材育成や、グローバルな視点を持った地域貢献できる人材育成に成果を感じる。</p> <p>【今後の課題】 歯学部の授業カリキュラムにFlexibilityがないため、どうしても8、9月または3月のみの現地派遣となってしまう。現在、本校の教員とすべての協定校の教員間では良好かつ信頼したコミュニケーションがとられている。しかし、学生たちはまだまだ現地派遣前のコミュニケーションが足りないように思う。鹿児島大学の学生がおとなしく、オンラインでの研修でも、現地校のホストの学生より積極性が乏しいことがある。しかし現地研修から帰ってくる人や、積極的に参加し、自分の積極性をもっと出したいとの感想を述べることが多い。より積極的に現地の異文化の理解が渡航前に進めることにより、現地ですらに大きく、深く多様性を理解するのではないかとと思う。派遣前の研修は通常の授業とのバランスをとることが必要ではあるが、オンライン事前研修をより充実させたり、何らかの新たな方法を取り、現地での異文化やシステムの違いをより深く認識させ、現地での研修をより充実させることで、帰国後にはグローバル化する地域に貢献できる人材育成に期待する。</p>	